

今日のメディアの課題はなにか
新聞人はどう踏ん張るのか

「私たちメディアは今、自らやすきにながれ
ていると思う・読者・視聴者のレベルに合わせ
るといいながら、実は自分のレベルが低いから
面倒な話を避けているのではなかるうか。やや
こしい話を分かりやすく説明するには一段と深
い取材、勉強が必要だからだ」。

4月23日付『毎日』の「発信箱」の記述だ。

「面倒な話」「ややこしい話」とはどういうのを
指すのだろう。「深い取材、勉強」の「深い」と
はどういう意味だろう。詮索に限度がないから、
疑問だけをだしておこう。

たとえば「憲法改正」という問題は、「面倒な」
「ややこしい話」であるか。政権党などの案を
読めば、別に「深い」勉強をしなくても、国民
の未来・国の将来・世界の明日にとって、本当
に「改正」なのかどうか、「改悪」といえるので
はないか、は「社会の木鐸」としてのジャーナ
リストなら識別が容易なのではないか。しかも
分かりやすく説明できるのではないか。

政治の話はダサイ・ウザイ、あるいは難しい
とする風潮があるなら、そうではないことを「分
かりやすく」語るべきではないのか。

「あまりに短絡的な風潮が広がっている」と認
識するなら、それを批判しあるいは警告する「気
概」がメディアには必要なのではないのか。

「次は政治決戦となる参院選。何が問われる選
挙か。『こんな時こそ新聞』の気概で私も少し
踏ん張りたい」と、論説室の与良正男氏は書く。

いまメディアにもっとも欠けているのは権力
に対する批判精神、主権者国民にたいする啓蒙、
人間社会・地球世界の未来像への理念ではない
のか。個人の異議申し立て発言や集団の訴訟の
結果を報じて、たとえば憲法「改悪」に反対
する広範な運動は記事にしていけない、という印
象をもつのだが。だから、『こんな時こそ新聞』

の気概」という言葉は実にうれしいのだ。
与良正男記者がどう「踏ん張りたい」のか、
期待をこめて注目しよう。

4月30日付「発信箱」でも与良記者は「踏
ん張る」という言葉を使っている。

「私は今の憲法で、なおしばらく踏ん張るべき
だと考えている」。こうお書きである。「なおし
ばらく」という限定語が気になる。「しばらく」
は、『広辞苑』第五版の解説では「①少しのあい
だ。しばし。暫時。当分の間。②久しいさま。
ひさしぶり。③かりに。かりそめ。一応。」とあ
り、「しばらくぶり」は「前回から長い時間が経
過していること。ひさしぶり。」と定義されてい
る。与良記者がどの意味でお使いなのか、わた
しには判らない。判らないから気がかりなのだ。
そして、こういう表現から、記者の態度を日和
見主義や大勢順応主義、あるいは優柔不断と断
じることもあるだろうし、慎重で熟慮断行主
義者と評することも出来るだろう。明晰な言葉
を用いることは、なかなか難しい。

「もし、首相が『改憲すれば、こんなにすば
らしい国になる』とストンと落ちる説明をして
くれるなら、もう手を挙げて賛同するだろう。」
ともお書きだ。

首相にこういう説明が出来るはずはないのだ
が、万が一にもそうなら、と、皮肉をこめての
記述なのだと思うことにする。

以前にも書いたが、わたしたちは騙されやすい。
数字や記号にも、そして日常語にも騙される。
オレオレ詐欺・靈感商法などの媒体はことば。

「改める」とは普通「あるべき状態になおす。
改善する。正す。」の意味で使うから、「改革」「改
正」「改憲」は、すべて良いこと・善なることと
受け取る人がいても当然なのだ。「憲法改正」と
新聞が書くのも詐術なのだ。